

(新潟県)

関係人口増大とにぎわい創造で 元氣なまちの源泉はアートと地域資源の 利活用

豪雪地帯の宿命を強みに変換
構築された豊かな雪国文化

新潟県南部に位置し、市域の一部が長野

県と接する十日町市は、平成17(2005)

年4月1日、旧十日町市(昭和29/1954

年市制施行)と旧中魚沼郡川西町および中里



令和7年11月1日に開催された「新市誕生20周年記念式典」(越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館「段十ろう」にて)



松之山地域の丘陵地帯に広がるブナ林はその美しさから「美人林」と呼ばれている。四季折々の劇的な変化が観光客に大人気だ(写真は春景色)

村、旧東頸城郡松代町および松之山町の1市3町1村の合併により、新生十日町市としての歩みを開始した。昨年(令和7/2025年)4月1日には、新市の誕生20周年の節目を迎えている。

平成17年の合併の結果、十日町市の面積は約590km²となり、旧十日町市の約2.8倍にまで拡大。東京23区を含む全国815市区のうち108位に相当する広さだ。

人口については昨年12月31日現在で4万5992人(住民基本台帳/外国人居住者も含む)。現十日町市エリアの人口は、今から76年前、昭和25(1950)年の10万4318人がピークで、平成17年の合併時は6万2058人だった。

高齢化率は松之山地域で57.7%、松代地域で50.1%に達し、市域全体の平均でも令和2(2020)年の段階で39.9%と、県内2番目の高さで推移している(高齢化率は【第3期十日町市人口ビジョン/令和7年

せきぐちよしふみ
関口芳史
十日町市長

3月策定)より。

十日町市の人口面におけるこうした現況は、少子高齢化および人口減少、過疎化などの観点から「日本の近未来の様相を映し出す鏡」ともされる。一方ではそうした状況をね返すべく、多彩な地域振興施策・事業が実施され、元氣なまちづくりへの成果を挙げつつあることから「高齢化先進都市」とも評される。

実際、十日町市においては、人口減少や



雪の壁の中を歩く小学生たちの登校風景。雪国十日町の昔から変わらない、これも原風景の一つ



信濃川の河岸段丘を覆う純白の雪景色。十日町の冬の原風景の一つだ



うんどう広場・あそび広場・会議室・多目的室などで構成される十日町市児童センター「めぐらんど」は、厳冬期にも遊べる小学生以下が対象の通年施設



廃校となった小学校を活用した「雪原学園」は、グランピング&キャンプを通じて、雪国の冬の暮らしを模擬体験できる交流拠点の一つだ

また、第三セクター・北越急行(ほくほく線)の十日町駅前から市役所周辺に至る中心市街地では、雪下ろしのしやすい急傾斜の屋根を持ち、1階がコンクリート造りで玄関が2階部分にある独特

十日町市および魚沼地方の豪雪ぶりは、十日町市の毎冬の除雪事業の予算が約20億円〜30億円に達し、そのうち市の負担分は約10億円〜20億円に上るとい

う例を挙げただけでも明らかだろう。十日町市における近年の年間予算規模(一般会計と特別会計の平均的な合計)は500億円弱で推移しているが、年間土木予算の3割〜5割が除雪事業に費やされていることになる。ちなみに、本年2月2日11時現在、気象庁の発表では十日町市の積雪深は251cm。十日町市を含む魚沼地方のひと冬の平均的な最大積雪深は約200cmとされるが、早くもそれを上回っている。降雪量の総計は7m〜13mにまで及ぶことも珍しくない。本稿掲載号が発行される頃(本年3月初旬)には、十日町市および魚沼地方の積雪量はどれほどになっていることだろうか。

十日町市の豊富な地域資源を象徴するのは「豪雪」だ。周知の通り、十日町市の位置する魚沼地方は、日本有数の米作地帯であると同時に「名にし負う豪雪地帯」としても知られてきた。

取材日は令和7年11月25日で、今冬の初雪は例年より若干早めの11月18日だった。その後は降らなかつたようだが、最初に訪れた松代地域の日陰では、20〜30cmほどの残雪が見られた。

ことにより、後に述べるように、新たなにぎわいを創出することに成功している。

水を随時噴出し、道路の雪を溶かす「消雪パイプ」の試験も、11月12日付「十日町市公式インスタグラム」によると、駅周辺や中心市街地で既に開始されていた。



な様式の「高床式・落雪式住宅」の1階の窓などが、既に板で覆われている様子が見られた。庭木にも雪よけの板や棒などの「雪囲い」がなされ、寺院の山門前や境内にたたずむ地藏尊も、頭部が手作りのかわいい防寒頭巾で守られていた。

11月下旬の十日町市はこのように、冬本番に向け、早くも「準備万端」の様相を呈していた。そして、こうした町並みに身を置いたときに改めて想起されるのは、江戸時代後期の名著「北越雪譜」(鈴木牧之・著)のことだ。



近代以前の織物産業を底辺から支えたのは雪国の農家の人々。織物は田畑が雪に覆われた冬の重要な収入源でもあった(十日町市博物館TOPPAKU)

『北越雪譜』には十日町市も含む魚沼地方(鈴木牧之は十日町市に隣接する現南魚沼市塩沢に在住した縮仲間商・質屋)に暮らす人々が、雪に圧倒されつつも雪を懸命に活用し、あるいは雪に生かされる暮らしを通じて、地場産業から子ども遊びに至るまでの豊かな《雪国の生活文化》を構築してきた様子が活写されている。

実際問題、産業面に焦点を絞れば、現代においても工業製品の製造から、米作り、酒造り、野菜づくりなどに至るまで、冬季に降り積もった雪が生み出す雪解け水や雪解け水から生成される地下水の利活用を抜きには、語るができない。

魚沼地方のもう一つの伝統産業「越後上布(奈良時代から生産されてきた高級麻織物／重要無形文化財)」や「越後縮」、さらに「絹織物」などの織物産業も、その発展史には雪が重要な役割を果たしてきた。越後上布の仕上げ作業には、かつて雪の上で天日にさら

す「雪さらし」が不可欠だった。また、空気が乾燥しやすい冬季も、積雪が適度な湿気をもたらすため、加工の際に切れやすい絹糸を切れにくくさせる効果を発揮するなど、雪は絹織物の産地としての十日町市の強みをも支えてきた。

冬季に蓄積された雪は雪室に保存することで、天然の冷蔵施設ともなる。その技術は時代とともに進化しながら継承され、現在では米などの農産物や酒の保存だけでなく、クリーンな冷熱エネルギーとしての多彩な活用もなされている。

近代以前における米や酒、織物などの特産品を運ぶ水運の大動脈としての信濃川の重要性は言うまでもないが、それを支えたのも、大量の降雪がもたらす、年間を通じての豊かな水量だった。

十日町市で大正時代に創業された老舗の着物メーカーを営む家に生まれ、同社への勤務経験を持つ関口芳史十日町市長(平成21/2009年5月に就任、昨年5月から5期17年目)も、見方によっては宿命とも捉えられるがちな豪雪を「少しずつ生活の糧とし、世界に誇れる雪国文化を構築してきた先人たちの努力と英知、豊かな発想力には、改めて感服せざるを得ません」と語る。



縄文遺跡「笹山遺跡」から出土した5000年前の国宝・火焰型土器(新潟県笹山遺跡出土深鉢型土器/十日町市博物館)

日本遺産と「大地の芸術祭」が示す雪国・十日町市のモノとコト

十日町市をはじめとする魚沼地方の豊饒な雪国文化は今日、《日本遺産／究極の雪国とおかまち 真説!豪雪地ものがたり》のストーリーとそれに関連する各種取り組み、3年に1度開催される世界最大級の国際芸術祭《大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ》(以下、大地の芸術祭/開催地は十日町市および隣接する津南町)の基本理念「人間は自然に内包される」などに集約・シンボライズされ、新たな息吹の生成とともに、多彩に発信されている。

それは同時に、関口市長が就任以来の一貫したマニフェストとして掲げる「Uターン・イターンの推進」「怒涛の人の流れの創

十日町市

市 政 ル ポ

(新潟県)

出]「脱炭素社会のトッパー」を目指し、実現するための源泉・原動力ともなっている。

「物事には良いところも悪いところも両面ある訳ですが、十日町市や魚沼地方に関していえば、それを象徴するのが『豪雪』なのです。そして、良いところというのは、得てして地元の人々には見えにくく、マイナスの部分ばかりが目についてしまうのではないのでしょうか。長い歴史の結果に培われてきた十日町市および魚沼地方独自の雪国文化も、地元ではあまり自慢できるものではないと考える傾向が比較的最近までありました。過疎化の急激な進展などの影響もあってか、地域全体が少々自信を失っていたのだと思いますが、外部の人に地元の良いところを褒められると、ようやく、『ああ、そうだったかな』と気づいて、自信が少し回復する。

私自身、Uターン組の1人で、地元への客観的な視点を比較的持っていたせいか、子どもの頃に離れた十日町市に、平成7(1995)年に22年ぶりに帰ってきた当初は、周囲の人たちと話していてそのことを常に感じていました。今日では国際的な評価をいただいている『大地の芸術祭』も始まっていませんでしたし、心ある人たちも現状のままではダメだと思いつつ、活気を失っていく地元に向けた有効な打開策を見いだせないでいたのだと思います(関口市長)

関口市長は十日町市に生まれたが、中学生の時に東京に転出。家業の着物メーカーの東京出張所で生活しながら、東京の中学・高校・大学を卒業後、大手証券会社に就職。同社のイギリス現地法人への出向などを経て、平成7年に「父や兄弟が亡くなり、母親が一人になってしまったので帰郷し、家業に従事(関口市長)することになった。市町村合併の3年前に当たる平成14(2002)年3月に退職するまで、地元青年会議所の活動などを通じ、まちづくりにもさまざまな形で関わるようになった。そして、家業の着物メーカーを退職後の進路は、旧十日町市の助役だった。



大地の芸術祭企画展「こたえは風に吹かれている」

Photo by Nakamura Osamu

「当時の十日町市長のお誘いによるものでしたが、平成17年春の市町村合併に伴う市長選挙で、その市長さんが落選したことから、私も失職ということになりました。しかし、数カ月後には、三条市の当時の市長からお声がけをいただき、三条市の収入役に就任することになりました。三条市では2人の市長の下で、平成20(2008)年まで3年間にわたり収入役を務めました(関口市長)

「生き馬の目を抜く」とも表現される大手証券会社への長年にわたる勤務を経て、家業を手伝うべく帰郷してから14年目の平成21年4月、関口市長は十日町市の市長選挙



「大地の芸術祭」に出品された野外常設のアート作品や新緑、美しい棚田の景色を眺めながら行われる「越後まつだい春の陣トレイルランレース」



農舞台と花咲ける妻有

Photo by Nakamura Osamu



マ・ヤンソン/MADアーキテクト「Tunnel of Light」(大地の芸術祭作品)

Photo by Yamada Tsutomu

に初出馬して当選。前述のように5期17年目の現在に至っている。

「自治体の助役や収入役、ましてや、ふるさとのまちの市長になるなど、帰郷した当時は全く想像もできませんでした。しかし、まちづくりへの参画や、助役・収入役としての6年間の行政経験を経て、周囲の勧めもあり、市長選に挑戦する覚悟を決めました。

マニフェストの基盤については、多少の表現の違いがその時々であるにしても、十日町市の持続可能な近未来を実現するために『Uターン・イターンの推進』『怒涛の人の

国文化』の存在とが、土台としての役割を果たしているように思われる。

「大地の芸術祭」から派生する 交流・関係人口の新しいカタチ

「日本遺産」の認定要件でもある、雪国ならではの昔からの生活の知恵や工夫、豪雪地だからこそ発展した産業などについては既に概略を述べた。十日町市の魅力のもう一つの発信源となっている「大地の芸術祭」は、地域の魅力を発掘し直し、地域の人々の自信と誇りを再醸成する手段としての

アートの役割と無限の可能性を示したという意味においても、画期的な役割を果たしている。

「大地の芸術祭」の後に誕生し、現在「日本の三大トリエンナーレ(総合ディレクターはいずれも北川フラム氏)」として、「大地の芸術祭」と同様、3年に1度ずつ開催されている「瀬戸内国際芸術祭」(四国側の高松港、本州側の宇野港とその間に点在する瀬戸内海の島々で開催)および「奥能登国際芸術祭」(石川県珠洲市全域で開催)が、やはり国内外から毎回多くの人々を引き付けているのを見ても分かるように、「大地の芸術祭」は現代のまちづくりの重要コンテンツ「アートのまちづくり」のまさに先駆けである。

ちなみに、これまで9回開催された「大地の芸術祭」の入込客数は平均で40万人以上。直近の第9回展(令和6年)は約4カ月の会期中に約55万人の交流人口が見られた。

さらに回を重ねるごとに地域に蓄積されるアート作品の数は会期中の記憶と共に増えていき、新たな地域財産となっていく。その循環は、大地の芸術祭がある限り、エンドレスに続くことだろう。

しかし、それと同等、あるいはそれ以上に重要と思われるのは、「芸術祭にさまざまな立場から関わる人々の数が増えるとともに、市民の間に蓄積されていく地域愛や、外部から訪れるアーティストをはじめとする関係者、さらには増加し続ける来訪者と、

十日町市

市 政 報

(新潟県)



担い手のない棚田を維持しながら、地域振興や大地の芸術祭の運営にも関わるために移住してきた女子サッカー選手たちで構成される「FC越後妻有」は全国的にもユニークな実業団チーム

市民との交流が生み出す化学反応」(関口市長)だ。

そういう意味合いからも、「大地の芸術祭」から誕生した女子サッカーの実業団チーム「FC越後妻有」の存在は、「大地の芸術祭」から派生した「関係人口および移住・定住人口の創出のための新たなカタチ」ともいえるべき、ユニークな事例の一つといえる。

「FC越後妻有」の存在は確かに、移住・定住の形態として、いろいろな意味でユニークです。彼女たちは、元々は『なでしこリーグ』への参戦を目標とする実業団の女子サッカー選手です。同時に、十日町市の地域財産である棚田(まつだい棚田バンク)を維持する、農の担い手として全国から移住して

きた就農者でもあります。また『大地の芸術祭』が開催されるときにはスタッフの一員として機能し、日常的には地域イベントなどへの参加を通じて地域の振興に寄与する、地域おこし協力隊的なミッションもこなしています。つまり、サッカーと農業、地域振興を職業とする実業団チームへと、多彩に進化してきています。

このプロジェクトは『大地の芸術祭』をキッカケに派生したのですが、全国に数ある『担い手のいない里山』の環境を維持するための、モデルケースにもなり得る取り組みと自負しています(関口市長)

さらに、十日町市は日本遺産の認定を受けた令和2年に、2050年までに二酸化炭素排出実質ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」の宣言もしている。

これまで述べてきたような、先人たちが培った「雪国文化」をバージョンアップしながら継承し、豪雪地の里山の環境を独自の手法で積極的に維持・活用する現況の態勢こそは、そのままゼロカーボンシティやSDGsへの各種の取り組みにも有効で、なおかつ持続可能な近未来に続く道筋といえるのではないだろうか。

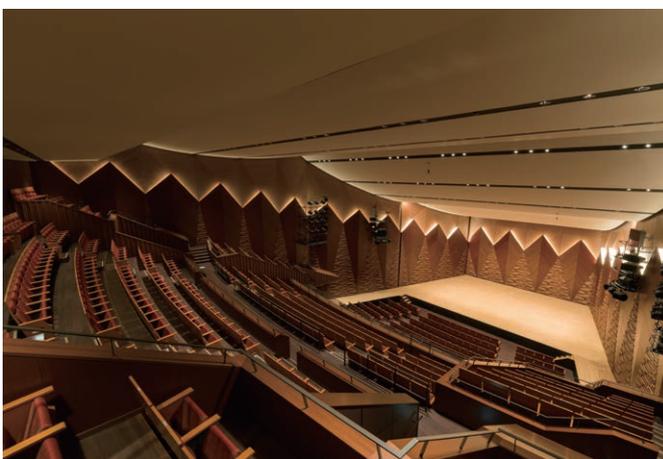
ちなみに、アートによるまちづくりの先鞭ともなった「大地の芸術祭」が持つ地域振興における革新性が評価され、令和3(2021)年には、日本経済団体連合会が推進する地方創生の取り組みである「地域共

創アクションプログラム」の連携先の一つとして「大地の芸術祭実行委員会」が選定されている。

雪国の伝統的な暮らしの現代的ブラッシュアップ、アートを通じたまちづくりの推進による地域の魅力発信、多彩な手法による関係人口と移住・定住人口の拡大など、十日町市の多岐にわたる活性化施策が「Uターン・イターンの推進」「怒涛の人の流れの創出」「脱炭素社会のトップランナー」という目標を、これからさらにどのような推進力を付加しつつ、実現させていくのか。

大きな期待と共に、今後の推移・発展を待ちたい。

(取材・文：遠藤隆／取材日：令和7年11月25日)



芸術・文化振興の拠点施設・文化ホールと中央公民館機能が合体した「越後妻有文化ホール・十日町市中央公民館「段十ろう」」は、中心市街地のにぎわい創出のための交流施設